

『そんなの気にしない』

著：坂井朱生

ill：冬乃郁也

「だって高津さんは、女の子がいいんじゃないの!？」

じり、とあとじさってしまったのは、修司の射るような瞳の強さのせいだ。

揶揄われているだけなのに、どうしてか視線が外せない。

修司の腕がゆっくりと伸ばされ、灯の細い顎を掴んだ。

「な…なに!？」

「俺はね、どっちでもいいんだよ」

わざと低めた、擦れた声。背筋がぞくと震えた。

「そん——な」

動けない。身体が、見えないモノに包まれたように逃げられなくなる。

「まるっきり疑わなかったのか？」

考えもしなかった。

こくりと頷くと、修司はにやりと口の端を吊りあげて笑う。

「欲求不満も解消できねえのに、遼さんにそっくりな顔して、ヒトをさんざん煽ってくれたよなあ？」

「俺……は……」

顎を掴んでいた手が、するりと頬に動く。産(うぶ)毛(げ)を撫であげるように触れられて、灯はピクリと肩を竦ませた。

「警告はしたぞ？ よけいなところに触るな、って何度も言ったよな」

修司の指が、すっと唇の上をなぞった。

「なんでもするっていうなら、俺の相手でもしてみるか？」

「——ッ」

ふるふると首を横に振っても、修司の手は執(しつ)拗(よう)に灯を追ってくる。瞼から鼻(び)梁(りょう)、唇へと、指の悪戯は止まなかった。

「俺、ちが……っ」

「違う？ 俺を引きとめるなら、それぐらいしてもらわないとなあ。おまえになにかしろとは言わねえし、黙って寝てるだけでいいぜ。天国、行かせてやるよ」

このところの騒ぎですっかり忘れていたが、修司はこういう男だった。今まで隠れていた艶めいた気配を、濃厚に漂わせている。

「俺は、叔父さんの代わり……？」

できることならなんでもする。そう言ったし、その気持ちには嘘はない。

(だけど……っ)

流されてしまうには、どうしても気持ちの中にしこりが残る。

遼と修司とは、そういう関係だったのだろうか。そして自分は、遼の代わりに修司に抱かれるのだろうか。

「不満か」

突きつめて考えて、灯は顔をこわばらせた。

抱かれるのが嫌なわけじゃない。

こんなふうに作為をもって触られても、神経が受けとるのは快樂ばかり。そろそろと肩から腕までを蠢(うごめ)く修司の指に、考えていたような嫌悪感はない。それどころかときどき、じわりと疼(うず)くような快感が肌の上を走るほどだ。

「そうじゃない、けど」

力なく首を振った灯に、修司はあくまでごく軽い愛(あい)撫(ぶ)を続ける。

逃げるのも留まるのもおまえ次第だ。

そんなふうに、選択を迫られているような気がした。

「高津さん、本当に叔父さんと……なの？」

「さあな。どうした、『おまえが好きだ』とでも言ってほしいのか」

耳元で擲(う)ちように囁(ささや)かれて、灯はカアッと顔を赤らめた。

凶星だ。

修司からの告白を待っている。肌を重ねる理由を欲しがっている自分に、灯は唇を噛んだ。

要するに、自分の感情はとっくに、修司と抱きあうことを望んでいる。

「選べよ。俺は別に、相手に困ってるわけじゃない。おまえが嫌だってんなら、無理強いするほど飢(う)えてもいない」

気づいて、愕(がく)然(ぜん)として、力が抜けた。

修司を好きだとか嫌いだとか、自分の感情の行方すらハッキリとわからない。

けれど、『俺の相手を』と言われて、とっさに頭に浮かんだのは拒否ではなく、彼の腕を待つ自分の姿。

修司のシャツを掴むと、一番上のボタンを外した。それが返事の代わり。

灯には、これが精一杯の意思表示だ。

一生の別れというわけでもないのに、たかが家に帰ると言われただけでこれほどショックを受けているのが不思議だったし、抱かれてもいいと、抱きあいたいと思う自分に至っては、なにを考えているのかと驚くばかりだ。

——ただ、彼の傍にいたい。

灯が服を脱ぐ理由は、それだけで充分だった。

本文 p147～150 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>